Osaka University Knowledge Archive

Title	趣旨説明
Author(s)	宇野田, 尚哉
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 91-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27063
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集②
グローバル冷戦と文化
――広島／日本／東アジアから考える――

日本学研究室では、毎年、日本学方法論の会と称する研究会を開催し、その成果を本誌に特集として掲載している。今年度は、前期と後期に１度ずつ研究会を開催した。この特集②は、後期に開催した２度目の研究会の記録である。

２度目の研究会は、2013年11月２日・３日に奈良教育大学で開催された第７回戦後文化運動合同研究会の第３セッション「グローバル冷戦と文化―広島／日本／東アジアから考える―」を日本学方法論の会との共催としていただくかたちで開催した。戦後文化運動合同研究会とは、戦後日本の文化運動（とくに1950年代のサークル運動）を研究対象としている複数の研究会（具体的には、筑豊・川筋読書会、文化工作研究会、原爆文学研究会、『ヂンダレ』研究会、『われらの詩』研究会など）が2008年以来合同で開催してきた研究会である。宇野田が第３回以来この研究会に関わってきた経緯があり、今回は共催をお願いすることとなった。こころよく了解してくださった戦後文化運動合同研究会のみなさん、とくに第７回研究会をコーディネートしてくださった中谷いずみさんに、この場をかりてお礼を申し上げたい。

なお、本特集は、以上のようなかたちで開催された研究会の記録であるため、そのことを踏まえないと文脈のわかりにくい箇所が少なからずあると思われる。その点、読者にあらかじめお断りするとともに、お読みいただく際のご配慮をお願いする次第である。

本特集は、企画を担当した私の趣旨説明、お二人の報告者による研究報告、お二人のコメンテーターによるコメント、当日の討論、お二人の参加者による参加記などからなっている。本特集を組むにあたっては、報告者のお二人をはじめ、多くの方々からご協力を賜った。あらかじめ記して謝意を表したい。（宇野田尚哉）

趣 旨 説 明

宇野田　尚　哉

はじめに

それでは、第３セッション「グローバル冷戦と文化―広島／日本／東アジアから考える―」を始めさせていただきます。

まず最初に、このセッションの位置づけについて、私から簡単にご説明させていただき

ます。このセッションについては、私からお願いして、戦後文化運動合同研究会と、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室が毎年開催している日本学方法論の会との共催というかたちにさせていただきました。その理由は、昨年度私が中心になって開催した日本学方法論の会のテーマ「被爆体験とその表象」からの内容上のつながりなど、いくつかあるのですけれども、一つの理由は、このセッションの記録を紀要に掲載して残しておきたい、ということです。昨年度の研究会の記録を掲載した紀要を参考までにお回しいたしますが（前号特集参照）、このセッションの記録もこれに準じたかたちで残しておきたいと思っておりますので、お含みおきください。

それでは、以下、３点に分けて、このセッションの趣旨を説明させていただきます。

１．復刻を機に議論の場を設けておくこと

最近、京都の三人社から、２種類の復刻版が刊行されました。河本英三を中心とする『希望（エスポワール）』と峠三吉を中心とする『われらの詩』です。鳥羽さんは『希望』の推薦者、川口さんと私は『われらの詩』の解題執筆者ですので、いずれもこれらの復刻版刊行の当事者と言ってよい立場にあります。このセッションの議論の出発点は、この２つの復刻版です。

私がこのセッションを企画した第１の理由は、非常に単純で、復刻版を出しっぱなしにはしたくない、ということです。私が以前に在日朝鮮人のサークル詩誌『ヂンダレ』の復刻に関わった際には、資料を発掘し、研究会を作って共同で読み、復刻版を刊行し、シンポジウムを開催して、その成果を単行本にする、ということを、かなり意図的にやりました（復刻版『ヂンダレ・カリオン』〔不二出版、2008年〕、ヂンダレ研究会編『「在日」と50年代文化運動―幻の詩誌『ヂンダレ』『カリオン』を読む』〔人文書院、2010年〕参照）。ここにおられる方々にはかなりの程度共有されているスタンスだと思いますが、サークル運動の研究を、当事者や研究者以外の人々を巻き込みながらある種の運動としてやる、ということを、方法的にやったわけです。『われらの詩』についてはシンポジウムを開催したりその記録を刊行したりということまではできそうにありませんが、『希望』とあわせて、復刻版の刊行からあまり時間をおかずにとにかく議論の場を設けておきたかった、ということがあります。

高価な復刻版が誰にも開かれることのないまま図書館の書庫に死蔵される、というのはよくあることなわけですが、資料の性格から言って、『希望』や『われらの詩』はそのようであってはならないだろうと考え、お忙しいのを承知で鳥羽さんと川口さんに発題をお願いした次第です。

2．『希望（エスポワール）』と『われらの詩』：重なり合いとずれ

ただし、『希望』と『われらの詩』を１つのセッションで取り上げることには、当然のことながら、どちらも最近復刻されたということにとどまらない必然性があります。両者の重なり合いとずれや、そこに注目することで開けてくる展望については、鳥羽さんと川口さんの報告を受けて討論するなかで明らかになっていくと思いますが、必要最小限のことだけをここで確認しておきますと、『希望』は、当時旧制広島高校の学生だった河本英三を中心とする学生たちによって1948年11月に広島で創刊され、河本が東京大学に入学したあと東京であらためて第１号から発行された雑誌で、1955年７月発行の第11号まで発行されました。河本を中心とする学生が当時の代表的な知識人からも助力を得て発行した総合雑誌風の雑誌で、その志向性は各号の表紙に「新らしい文学・芸術・社会・生活」と記されていることから窺われると思います。それに対して、『われらの詩』は、共産党の影響下にあるサークル「われらの詩の会」の機関誌で、峠三吉を中心に1949年11月に創刊され、峠没後の1953年11月に第20号で終刊しました。

両者はともに、広島での被爆体験を重要な前提としており、「サークル」を名乗りつつ「文化運動」を展開しました。しかしながら、政治的な立場性や組織化の方針、用いる言葉や呼びかける対象、あるいは将来への展望など、あらゆる面で対照的だったと言ってよいと思います。この研究会では、共産党や労働組合の影響下にある左翼「文化運動」としての「サークル」運動が主な議論の対象となってきたように思いますし、ここで取り上げる『われらの詩』はその典型なわけですが、それと対照的な『希望』をあわせて取り上げることで、議論の幅を広げることができるのではないかと考えています。とくに、性格の異なる二つのメディアにおいて被爆体験がどう形象化されたかという点は、これらのメディアが通時的・共時的にどのような可能性をはらんでいたか／いなかったかを問う、試金石になろうかと思います。

3．「戦後文化運動」をめぐる議論を開くために

以上、二種類の復刻資料とお二人の報告に即して、かなり具体的なかたちで議論の入り口を設定したつもりでいます。ただ、このセッション後半の討論では、もっと先までというか、なるべく遠くまで、無理やりにでも議論の射程を延ばしたいと考えています。以下、「グローバル冷戦と文化」という誇大妄想としか言いようのないタイトルをつけた意図と、コメンテーターのお二人に期待している役割について、もう少し説明させていただきたいと思います。

この研究会で「戦後文化運動」というとき、主に念頭に置かれているのは、日本の敗戦

から50年代にかけての文化運動、なかでもとくに、共産党や労働組合の影響下にあった左翼文化運動であろうと思います。また、その基層での担い手として当時高揚したサークル運動を重視する視点や、朝鮮戦争を（「特需」として外在化するのではなく）決定的要因として議論に組み込もうとする視点も、ほぼ共有されていると思います。さらに、（1950年代後半に50年分裂期の共産党主流派が政治的に葬り去られるのと同時に忘却された）朝鮮戦争期の共産党主流派系文化運動を位置づけなおそうという志向性も、暗黙の前提となっているように思います。

そのような枠組のもとで、当時社会に対して批判的な眼を持っていた無名の人々がどのように感じ何を考えいかに行動したかがさまざまなかたちで明らかにされてきました。そのことの成果は大きいと感じています。しかしながら、一方で、やや乱暴な言い方をしますと、前提を共有した仲間内でこれ以上事例を発掘しても仕方がない段階に入りつつあるのではないか、前提を共有しない人々に対してこれまでの成果を開いたり、これまでの議論の前提そのものを問い直したりすることが必要な段階に入りつつあるのではないか、とも感じます。「グローバル冷戦と文化」という誇大妄想のようなタイトルは、そのような問い直しを始めてはどうか、という提案だというふうに受け止めていただければと思います。

たとえば、1950年代を念頭に置きつつ、戦後日本の左翼文化運動について、東アジアという広がりのなかで考えてみるとどうなるか？　東アジアの分断線―38度線と台湾海峡―のすぐこちら側―すなわち韓国と台湾―では、反共独裁政権のもと、日本に見られたような左翼文化運動はそもそもあり得ませんでした。では分断線の向こう側―北朝鮮と中国―はどうだったかというと、権威主義的な労働党／共産党政権のもとそこでも自由な表現は許されなかったと言ってよいと思います。そうすると、当時あのような左翼文化運動がありえたのは東アジアでは日本のみであったという事実が見えてくるわけで、戦後日本の左翼文化運動を、東アジア冷戦構造のエア・ポケットに咲いたアダ花以上のものとして評価しようとするなら、共時的にも通時的にも、相当な理論構築が必要なように思われます。

戦後日本の左翼文化運動を通時的観点に立ってどう位置づけるかというのも―国民文化会議に帰結して終わり、というのではあまりにも広がりがなさすぎますので―大きな問題ではあるわけですが、ここでは通時的観点はしばらくおき、共時的観点に立つとするなら、日本との比較がそれなりに意味を持ち得るのは、東アジアの事例ではなく、西ヨーロッパの事例ではないかと思われます。戦後における解放空間の成立と、冷戦構造の形成・アメリカの介入のもとでのその閉止、というような歴史的経験を、日本と西ヨーロッパ諸国は共有しているのではないか、そこでの文化運動のあり方の比較には何らかの示唆が含まれ

るのではないか、と思われるのです。

以上のようなことを考えて、コメントは、ご自身の研究対象がこの研究会で扱ってきた対象と関わるとともに、外部的な観点からの発言もしていただけそうな方にお願いすることにいたしました。富山妙子を研究対象としている徐潤雅さんには、その文脈でのコメントに加えて、聖公会大学東アジア研究所編『冷戦アジアの文化風景１：1940～1950年代』（現実文学、2008年）などの内容に触れながら外部的観点からの発言もしてくださるようにお願いしてあります。また、山代巴を研究対象としているキアラ・コマストリさんには、その文脈でのコメントに加えて、戦後イタリアの文化運動との対比にも言及してくださるようにお願いしてあります。お二人にはかなり無茶なお願いをしているのですが、討論のなかでは、お二人の発言などを手がかりとしながら、より開かれたかたちで〈戦後日本の文化運動〉をめぐる問いを再定位していきたいと思います。

それではよろしくお願いいたします。

（うのだ　しょうや　大阪大学大学院文学研究科教員）